

## ニューヨークの美術紀行(その二)

翁長 直樹

ニューヨーク近代美術館は夏休みとあって、観光客でごったがえしていた。特に1階の「ウィーン1900年展」はまるで東京のデパートの有名画家展を思わせて一瞬ひるんだが、中に入ると意外に人の流れがスムーズで静かだ。今年の11月池袋のセゾン美術館で行なわれたのと同程度、もしくはそれ以上の人出であるが、こちらはたいした喧騒であった。ニューヨークのウィーン展はかなり規模が大きく、ウィーンの1898~1918年間の絵、建築、装飾、グラフィックデザインの全てを網羅したもので、その頃のウィーンが立体的、共時的に浮かび上がるようになっていて素晴らしい。クリムトやシーレ、ココシュカ等については、その世紀末的退廃美と相まって華麗な色彩で日本にもかなりのファンがいるが建築家オットーワグナーのスケールの大きさやヨーゼフホフマンの建築から家具作りまで手がける多才さについては一般的にはそれほど知られてないようだ。それにしても、20世紀に名を残す芸術家や学者達、マーラー、シェーンベルグ(音楽)、ヴィットゲンシュタイン(哲学)、リーグル(美術史)フロイド(精神分析)。数多くの傑出した才が、ある時期に一つの都市に集結したのは驚異である。2階は常設展であるが、後期印象派に始まり、キュービズム、表現主義、未来派、構成主義、モンドリアンと続き、マチス、クレー、ピカソは一部屋ずつ使って展示されている。その後はダダとシュールレアリスムとなって終わっている。要するに参観者が美術史の流れを体現できるようになっているわけだ。しかし、これこそまさに美術館のイデオロギー産出機能つまり制度としての美術史を作り出すことであるのだが、それでも日本のように美術館自体がまだ作品数が少なく、はっきりした理

念や展示方針がないところでは、そのような制度を見いだすことも困難である。アメリカの美術館は積極的に自国の美術史の構築に力を注ぎ込んで、そのエネルギーは美術史家、評論家も巻き込んで褒まじいものがある。それは、例えば近代美術館の3階の展示作品を見ればよく分かる。ミニマルアートからニューペインティングまで、まだ評価のはっきり定まってないと思えるものまで購入展示する大胆さは、日本では真似ができそうもない。ステラの80年代のアルミのレリーフ



フランク・ステラの作品

は2階入口壁画に大きく場所を取って架けられているし、フィッセルの作品もしっかり展示されていた。もう一つ面白いのはニューヨーク近代美術館も含めてアメリカの美術館の殆どが私立であり、企業の寄付で支えられているところである。これはどこかの国のように美術館がお役所の一部であるかのようなとまるで違って、企業は金は出すが口は出さないのも大きく異なるところである。そういう自由な場からこそ真にクリエイティブなことが可能なのであり、大量の作品が自由に購入できる資金があつてこそその

美術史の再構築も可能だと思えた。近代美術館を5時に出た後グッゲンハイムまで歩いて行く。火曜日は午後8時まで閉館しているので夕方だというのに(当然だが)人が大勢いて、中には少々ほろ酔い加減の男もいて僕に近づいて来てこの館の由来やら正しい見方等を説明し始めた。どうやら彼はこの美術館を誇りにしていて、仕事が終わるとたまに見に来るらしい。服装は仕事着のままである。周囲を見回すと、昼間の近代美術館とは参観者の層が違うことに気付く、黒人もかなりいる。エレベーターで最上階まで昇り、なだらかな螺旋状のスロープを下りながら壁面の作品と左側の部屋にある作品を順次見ていくシステムであるが、これはある意味で見る順位の強制である。ただクレーの作品をたつぷり見ることができ、これは嬉しかった。カンディンスキー、ミロの作品もかなりの数展示してあつて、まとめてみる事ができた。1階ではこの年に亡くなったニーベルスンの特集をやっていた。ニーベルスンは、初めて実物に接するのだが、図版で見ると異なりきわめて硬質で知的な感じがした。翌朝ソーホー地区に出掛けてみる。ソーホーは近年とみに観光化し、まるで原宿のようになりつつある。夏休みのために主要なギャラリーは殆ど休みなのだが、いくつか開いているところがあつて、その中の一つ「ニューミュージアム」は新しい美術の流れを作り出そうとしているギャラリーの一つだという事で見ることにする。「傷つけられた物達」-物質の欲望と経済-というタイトルで、資本主義社会で大量に生み出される物を別のレベルの物と併置したり、展示の工夫によって強いインパクトを与え、社会のシステムそのものを考えさせようという意図があつた。(おなが なおき=高校美術教諭)

\* 額縁の専門店 \*

合資会社 前田額装商会

〒900 那覇市松尾2-7-29 ☎(0988)67-4811 FAX(0988)61-0367



アートライフは、OCクレジットで。——

沖縄信販

〒900 那覇市松山2-3-10 ☎(0988)41-1123

# なぜ、ニューヨークなのか!?

VOICE INTERVIEW①

■画家・宮城 明

鋭い個性を武器に常に現代絵画と格闘する宮城明。19年前にニューヨークでアート武者修業をして、今回またニューヨークへ翔んだのは、憧れの画廊・O.K.ハリスに作品をぶつけてみる渡米であった。今回のニューヨーク活動の報告と現代の沖縄美術状況を合わせて語ってもらった。

※GV=ギャラリー・ボイス

GV 二度目のニューヨーク行きなんですけど、その目的をお聞きかせ下さい。

宮城 今回の場合は観光でもなく、ましてや感傷的な旅でもなく、自分がアタックするというか、ビジネスなんです。

GV ビジネス!これは面白い。

宮城 絵画をビジネスとしてとらえた場合、やはり現時点ではニューヨークしかないと思っているわけです。つまり一か八かのビジネスなんです。ニューヨークに行くことだけが賭でもないとは思いますが、要するに自分の作ったものが、単なる石ころにしか過ぎないかもしれない。磨きによって作りあげていくと、ダイヤモンドになるんじゃないかと思うわけです。自分が描き続けているというのは、単なる趣味なのかという疑問ですね。ビジネスというのは殆どなくて、ストレスの解消位で済ましているのではないかということです。精神の健康維持のためであったり、そういうのは飽くまで個人的なレベルでしか終わらないだろうという危惧が絶えずつきまとっているのは確かです。

GV ある意味では、今までの自分の芸術活動を精算してみる欲望もあったんじゃないですか。

宮城 いやそれはね、清算という意味にはちょっと早過ぎると思います。しかもスタートしたばかりだと自分では思っていますね。画廊沖繩でやらせて頂いた四年前の個展の時に、一つのモデルが出てきて、それを四年間暖めていたんですね。去年の個展の場合は、やっぱり本番に近いと言えると思います。自分が最初に構想を描いていた作品のスタイル、内容もね。やはりある程度ついてきているなど

いう感じがしています。そこで、まあ本土ではなくてニューヨークに行くことを考えたのは、どうせ金を遣うのであれば、やはりニューヨークだということで夏休みに行っただけです。

GV 今回は過去のニューヨークなどの経験と、今までの芸術活動を通して自分らしきもの、オリジナリティーが出てきたんだと思います。自分の作品を確認するというか、試す状況になったわけですね。先程言われたビジネスの一つとして自分の表現をクールに見て、ニューヨークの舞台に出してみるという具体的な行動になったわけですね。

宮城 まあ今回は段階的にチャンスを作



宮城 明氏

っていけばいいということで、スライドと資料を持って行きました。そこで作品を判断してもらって、ある程度は印象を与えておいて、また出直して来るつもりでした。だいたい、3年位で個展まで辿りつけば最高だと思っていたんですね。だからそういう意味では、今回のニューヨークでの反応はちょっと早過ぎるんですね。作品が向こうのオーナーの目に止まって、対応ができなくなる程の状態になってしまったのは…。自分自身が一番びっくりしているんですね。ですから今回の場合、一生に一度のチャンスだと思ってやりたいですね。

GV 沖縄のアーティストが自分の作品群をひっさげて世界の門を叩くというのは、現実にはたいへんなことですね。そこら辺から話をお聞かせ下さい。

宮城 僕が10年前に会社を辞めたというのは、やはり絵を描きたいという一心で

常に行動していたわけなんです。いつかは、ニューヨークで個展をやりたいということがありましたから、今回の状況になってきたんだと思います。

GV ニューヨークに着いてからは、どうでしたか。

宮城 とにかく、とてもラッキーだったと思います。その日は夜の11時にホテルに着いて、翌日は多少時差ボケもあったと思います。それでも早く起き出して、O.K.ハリスはどこだということで懸命に探すんですがなかなか見つからない。興奮していることもあって、画廊の位置をちょっと勘違いしているわけです。そこでちょっと目をそらすと、目の前にO.K.ハリスの文字が、ガラスに刷り込まれていました。でもそこにはちゃんと貼り紙がしてあって、10月の5日までサマーパケーションでクローズしているということで、鉄のドアがしっかりと閉まっているんです。頭をガーンとやられた感じがしましたね。仕方なくそこに座り込んでいたらボブ(※その後O.K.ハリスといろいろ連絡をとってくれる青年画家)がやって来るわけです。彼は僕の作品に非常に興味を持ったらしく、すぐO.K.ハリスに電話してくれたんです。あいにく留守番電話だったらしいんですけど、とにかく10月10日からスライド受け付けするから、それまでは待ってくれと言ったんです。なにしろ、僕のことを詳しく話してくれる約束をしてくれました。ボブは全く赤の他人だったんですけど、よくやってくれたと思います。僕が一旦、沖縄に帰って来たその後の情報ではO.K.ハリスのオーナーは僕のスライドを見て「彼には才能がある」と言っただけなんです。それで、とにかく作品をすぐに送ってくれということになったわけです。今思うとボブに会えたことは、とてもラッキーだったと思います。それで、彼がその後の受け入れ態勢を整えてくれるということでひとまず安心しました。まず、最初は模倣的な展示会をセッティングして、それからまた沖縄から僕が乗り込ん

有限会社  
画材専門 **ダイナカ**

代表取締役 田中 興 八

〒900 那覇市板志2丁目17の6番地 TEL(0988)61-7410 沖縄通りダイナカ向い

国家試験合格者輩出-No1の総合コンピュータ専門学校

専修学校 **CSCコンピューター学院**

那覇校 宇都宮校 那覇校 宇都宮校 宇都宮校  
那覇校 宇都宮校 那覇校 宇都宮校 宇都宮校  
那覇校 宇都宮校 那覇校 宇都宮校 宇都宮校



でいくという手はずなんです。

GV いよいよO.K.ハリスのオーナーの目に止まって、展示会をしようかといったところまでこぎつけたわけですが、現在の気持ちを聞かせて下さい。宮城 だけ画廊オーナーは、展示会をやるという約束は一切しないと云ったらしいんです。とにかく、作品を見てから判断するという事なんです。まあ、そこはすごく厳しいところがあるんです。GV とにかく企画展までこぎつけるといいですね。ところで話を沖縄との関連の中で進めていきたいんですが、沖縄における芸術活動の限界については、どうお考えですか。つまり、なぜ沖縄でなくてニューヨークに行くかということも含めてですね。沖縄での限界性があるから向こうに行くんであろうと思います。その辺の話を聞かせて下さい。つまり沖縄ではいくら頑張っても難しい部分があるということですね。まあ、17年前にニューヨークでアート生活をして、それがずーっと心の中に残っていて今回行くことになったと思うんですけど。沖縄の作家達も日々アート生活をしていく中で、宮城さんみたいな形でないにしても気持ちの中には、いつか自分も勝負してみたいという、そういう部分が少なからずあると思います。まあ、そこら辺のことも含めて、沖縄での芸術活動の限界についてお聞かせ下さい。

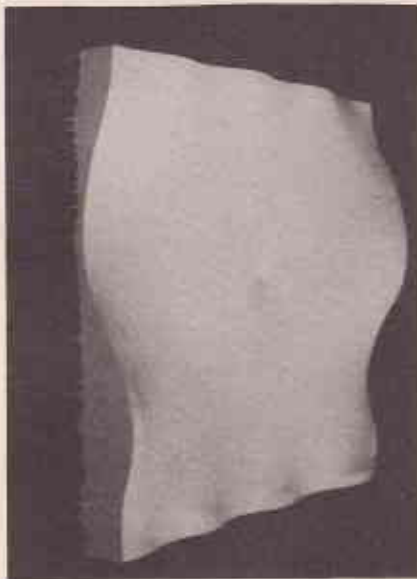
宮城 まあ限界と言いますとね。他者のせいにはしない方が、本当はいいんと思うんです。つまり環境のせいにはしない方がいいんです。しかし現実を感じている点で言うと、例えば沖縄の画廊で作品を発表した場合、その後のフォローが問題なんです。発表して、また新たに制作が始まるという、やはりその単なる繰り返しの形は近代以前という感じなんです。アート環境そのものがそうなんです。ギャラリー自体が街に出てきたというのも10年そこそこです。そういう中で、ギャラリー自体もまだまだ手探りの状態だと思います。まあ、ある意味ではアマチュアの域を出ていないんです。絵描きもまたそういう中で絵を描いているんだから沖縄のアート環境とは無縁ではないと思います。それは要するシステムというか、絵描きがいて、ギャラリーがあって、画商がいて、コレクターが

いてというそのしっかりとしたつながりが、沖縄の画壇は機能していないわけです。

GV それでは環境面をひとまず置いてですね、沖縄の作家側の熟成度はどうなんでしょうか。

宮城 それは、ある意味では欲求不満の固まりなんだと思います。絵描き自体、結局制作しているより付き合いの時間、酒を飲むという時間がかかりあって、制作よりも酒の席でエネルギーと金をすりへらしてしまっているわけです。そういう意味で、やり場のない仕事、状態だと言えらると思います。誰に不満をぶつけたらいいのかということですね、だから喧嘩がすぐに始まるんです。

GV 作家が制作する上でマーケットの限界とか、作品のテーマの限界とか、また芸術の限界とかそういった様々な限界が沖縄では混沌としているわけですね。特に発表してしまうと一過性に終わってしまうという、非常に難しい状況がありますよね。いくら弾を撃つてもなかなか



宮城 明 WOMAN(サイズ:89×87cm)1987

当たらないわけですね。まあ当たったにしても、あまり効果がないということですね。そこら辺が創作する意味での大きな限界、あるいは壁みたいなものになっているのかと思います。もっとギャラリーが増えて、作家が認められ評価されて、マーケットに流れてゆくというバックがあれば作家達も育っていくのかなあと、そういうイメージが出てきているんですけども。結局そういう時代を待つしかないわけですね。ギャラリーや作家た

ちが日々活動していきながら長い時間をかけて、その歴史を作っていくしかないというような感じがしますね。では、そのような現在の様々な限界の中での作家側の作品のあり方については、どうお考えですか。

宮城 分かりやすく言うとテーマないしコンセプトの問題だと思います。とにかく作品にはコンセプトをはっきりさせた方がいいと思います。情緒や気分にならなれないで、ましてや幻想的な発想には囚われないことが大事なんだと思います。コンセプトを明確にしていくことは、作品の背景をもしっかりさせることなんだと思います。つまり、この作品がなぜ生まれたのか、なぜ表現されたのかということですね。例えば素材で言うと、なぜカシガーなのか、なぜテントなのか、なぜこの色なのか、なぜこの線なのかということなんです。要するに絵を成り立たせている要素を、しっかり明確にしなければならぬと思います。コンセプトがしっかりしていれば、言葉で説明しなくてもいいわけです。説明したらダメだと思えます。つまり絵が語っていなければ、どうしても作家がカバー、あるいは美化しようとするわけです。いわゆる作家の自家撞着に過ぎなくなるんです。

GV つまり表現されたモノに語らせるということですね。それが、できなければ大して成功していないというわけですね。

宮城 やっぱ、モノがモノを言うというか物語るといふか、そういうことなんだと思います。そうじゃないと作品に背景が出て来ないと思うわけです。

GV 先程のO.K.ハリスの話と関連してきますけども、モノに語らせないと結局作品のスライドも力をもたないということですね。宮城さんがニューヨークのO.K.ハリスに持参して行ったスライドや英文メッセージ、資料などの中でスライドだけに目がいったというのは、やはりモノしか語り得ないということなんです。

宮城 もう彼等は作品だけしか見ないわけです。本人には、会わなくていいということで(笑い)。

GV 本日はどうもありがとうございました。これからの宮城さんのニューヨークや沖縄での活躍を期待して、終わりたいと思います。(1987.11.17)



**Kentucky Fried Chicken.**

株式会社 リウエン商事  
代表取締役社長 宮城 義明

〒901-21 沖縄県浦添市宇勢理客556番地 TEL.(0988)75-2168

“専門画材の店”



CULTURE PLAZA

株式会社 **みつや書店**

〒902 沖縄県那覇市壺屋1-1-3 ☎(0988)63-1650代

# 画廊沖縄情報

■屋富祖 盛美展/12月5日~10日



屋富祖 盛美作品

独特なフォルムの女性美を追求している屋富祖さんの2年振りの個展です。未来ファッション(?)に身を包んだ女性たちの発するテレパシーは、遙か遠い時間を想わせ、幻想的な不思議な世界へ誘い込むようです。現代のエロティシズムファンタジーとも言える世界は、透明な空間が広がっています。

## 新春スペシャル企画

■オールド版画展/1月9日~21日

ユトリロ、セザンヌ、プラマンク、ルノワール、マリー・ローランサン、ラウル・デュフィ、ボナールなどのエコー



ルドバリ時代の画家やオールドマスターなど、1800年代のオールドファッション版画や1920年代のデカダンスのバリの画家、チモやロベルリッシュなどの版画(銅版、石版)100点を展示販売致します。



ユトリロ作品(石版画)



1877年 Ravioliの作品

## ギャラリーマン

ニューヨークは近い!

去る6月に2週間程、ニューヨークに行ってきた。仕事を兼ねて現代美術の本場を体験するためであった。私がアメリカ絵画に初めて接したのは1976年、池袋の西武美術館で開催された『アメリカ美術30年』と題する現代絵画展だった。丁度、絵を学ぶために上京した頃の

初めての展示会だったので、今でも強い印象として残っている。しかし、その頃には全く意味が理解できず戸惑と驚きでしかなかった。ましてや12年後にニューヨークでそれを見ることができるとは夢にも思わなかった。ホイットニー美術館で、それらの作品群に再会した時、クーニング、ポロック、ゴッシー等の作品は今以て古さを感じさせず、より新鮮な印象を感じさせてくれた。ニューヨーク滞り期間中は、少しでもアメリカのカルチャーや民俗性に触れたいと思い、行動したつもりであった。言葉の壁はあったものの自分でも不思議なくらい自由に動き回ることができたのは、良かったように思う。マンハッタンの画廊巡りをしている、画廊には2種類あることに気付いた。一つは、ポピュラーな作品とポスターと一緒に販売している画廊ショップで、もう一つは限られた作家を扱っている専門画廊である。両者は、はっきりと区別されているようだ。アメリカで画家たちが出世するチャンスを掴むには、後者の名の通った専門画廊で個展をしなくてはいけない。そのために彼らは作品はもちろん、スライドや写真を持って積極的に売り込むのである。小さな島国沖縄では全く考えられないことである。1950年代以降、常に世界美術市場の中心であり続けたニューヨークの現在の状況は、新表現主義が終わり、幾何学的抽象のネオ、ジオやシュミレーションニズムに移行している。最近のアメリカ美術界は沈滞していると言われているが、ニューヨークにはまだ計り知れないエネルギーが秘められている様に思われる。ただ、今や世界は急速に狭くなり、どこも同一線上になってきたと考えられ、沖縄から世界的な現代アーティストが出てきても、全く不思議ではないと思う。そのためには画廊のあり方や画家たちの姿勢を今一度改めなければならないのではないかと。特に画家は物質的に恵まれたこの時代だからこそ、より精神的ハングリーを維持し、厳しい態度で創作活動をしてほしいものである。(長嶺 豊)

### アート・メッセンジャー

最近、絵の販売のために、あるお客様の所へ訪問したところ、「絵画レンタルの件ですか?」と、こちらの用件も言わないうちに決め付けられてしまったこと

があった。某会社がテレビやチラシを用いて大々的に絵画レンタルのPRをしているおかげで、絵=レンタルの図式が出来上がってしまったのである。確かに画廊沖縄にしても、絵画レンタルも行なっているわけだから、多くの人に知ってもらうのは嬉しい事だが、基本的に絵画は、やはり所持してもらうことに意味があると思う。良い絵を深く味わってもらうため、また絵の魅力を知ってもらうために私たちは自信を持って販売をしているわけだが、売り込んでいく以前に、もっと広く絵に接してもらうためにレンタルは企画されたものである。レンタル業務が開始されて既に4年になるが、その成果もそろそろ出てきたように思う。始めた当初と今とではレンタルの様相がだいぶ変わってきた。当時はレンタルをする所が飲み屋、飲食関係、そして病院と相場が決まっていたのだが、現在では次々と建ち並ぶインテリジェントビル、社屋、また住宅においても絵画レンタルをするのが増えた。以前よく出回っていた台湾絵やヨーロッパ風景のコピーの姿が消え、絵においても本物思考が定着してきた感がある。これからも、更に事務所や住宅に絵画が浸透していくのではないかなと思う。こういった絵画状況に伴い、お客様の絵に対する嗜好も変わってきた。以前は、具象画が主流で抽象画は理解出来ないからと敬遠されてきたものだが、最近では「まずは飾ってみよう」と興味を抱くお客様が増えてきた。やっとな沖繩の人たちもモダンアートに対する見解が変わってきたという感じである。人も建物も全て時代の流れによって変貌していく。沖繩もそんな時代にさしかかっているのかも知れないと思う。同時に私たちが扱う絵画も、時代を内包した作品であるかどうかが問われている。販売、またはレンタルいずれにせよ、質のいい絵画を見極めて紹介して行きたいと思う。

(豊平 秀樹)

## 編集デスク

後一ヵ月で世紀末10年が始まる。来春は、浦添美術館がオープン。美術展もグループ展から個展中心へ、乱立気味の画廊もポリシーの時代へ、美術ファンもファンからコレクターの時代へ、いよいよ沖繩にも美術の時代の幕開けか?(上)

Adlib 広告制作事務所  
アドリブ  
〒901-21 浦添市宇勢理客527 ☎(098)7776335



絵画・油彩・水彩・版画の専門店

画廊 沖縄

〒901-2 浦添市浦添2-2-2 ☎0987777777